

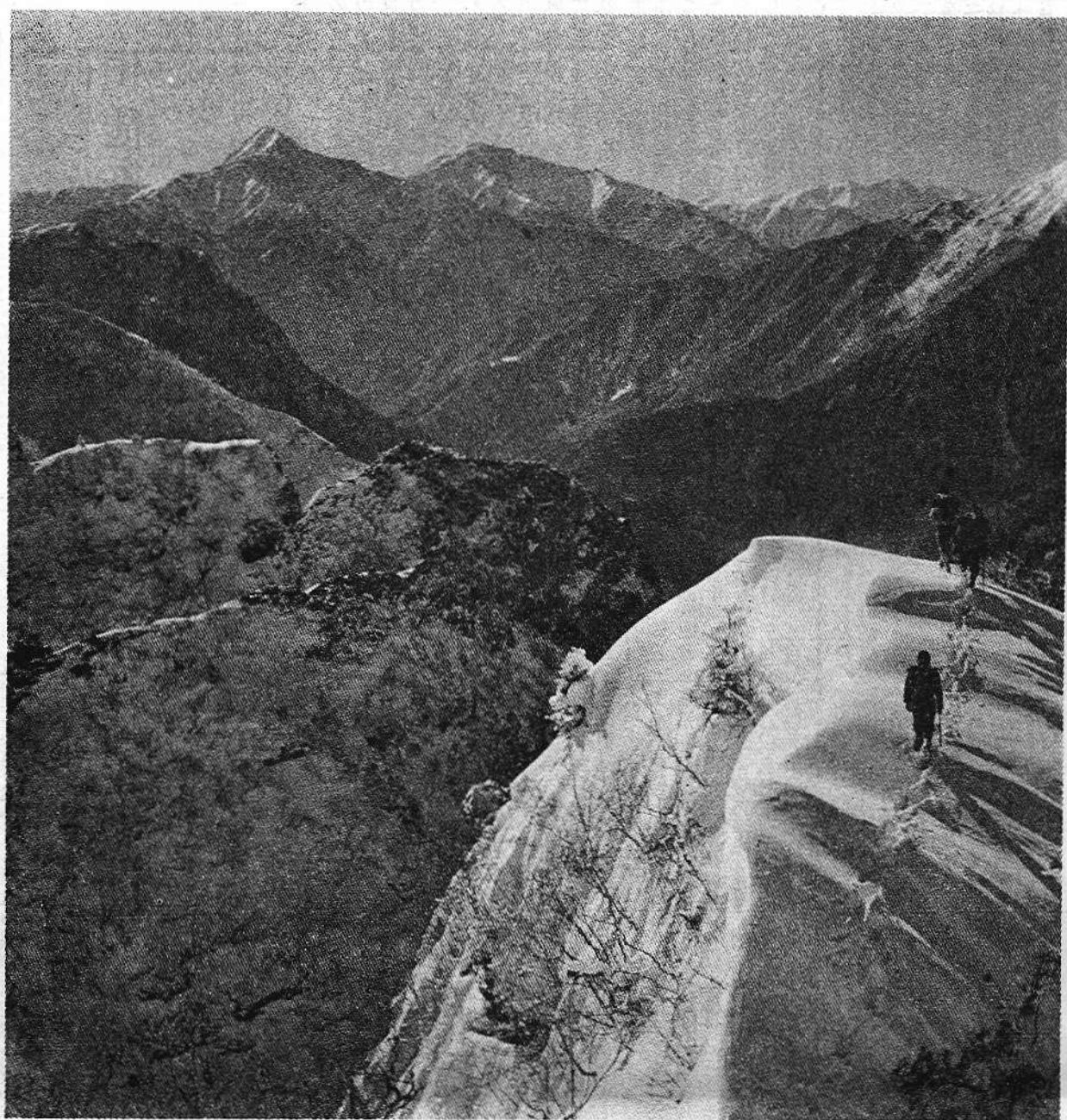
洛星新闻

洛星新聞編集局  
京都市北区小松原南町  
TEL(463)3281(代)

印刷 吉川印刷工業所

新生する新聞局

新聞を洛星に学ぶ  
すべての者の為に



局解  
総括

ここに、長らく休刊となつてい  
た洛星新聞を復刊します。洛星新  
聞しました。

閣下は、昨年の4月に新聞局再建  
 委員会を設け、その後、幾多の困  
 難を乗り越え、ここに復刊第一号  
 を発行します。しかし、この復刊  
 第一号においても我々は所々にい  
 い足りない所や、また、不満な点  
 が多く（いや全部と云つていいか  
 もしれませんが）ある種のもの足  
 りなさを感じているのです。そう  
 いう事を感じる事自体、我々の活  
 動の未熟さといえるかも知れませ  
 ん。しかし、我々が新聞を発行す  
 るにあたって、我々が活動をする  
 にあたって、最も強く感じたこと

そもそも、洛星新聞局は再建  
 時は生徒自身の主体的活動の発露  
 というべき、我々におけるあらゆ  
 る面におけるパイプとしての存在  
 をめざしたのでした。そして「決  
 して、新聞を我々局員だけの機関  
 誌にしてはいけぬ」として「生  
 徒の主体的意見の出現を待つ」と  
 という形となり、数回にわたるどう  
 やホスターによってそれをアペー  
 ルしてきたつもりであります。ま  
 た、今から考える「馬鹿らしいの  
 ですが「みんなで作る新聞」と  
 というスローガンをかかげたのであ

ります。しかし、それはここ2・3  
年の新聞のイメージを打破するまで  
にはいきませんでした。生徒の中  
からは依然「御用新聞なんかつぶ  
してしまえ」等の意見がよせられ  
ました。そのうち新聞局において  
めて、から局にきた投稿（本堂  
に出してくださった方には感謝し  
ています）の意見が一方的である  
という事と新聞局が新聞を発行せ  
ずして何の新聞局かという理由等  
の教育的配慮により、やむな

も「新聞なんかだとしても誰が読んでくれる。せいぜい鼻紙か計算用紙ではないか。一体、我々は誰の爲に新聞を出すのであろうか」として学校新聞とは何か」という疑問が起こりました。（これは今でも我々の考えのすみにあるのですが）しかし、我々は9月30日等の一連の集会における生徒の主体的活動というものによって希望を見出したのです。けれども中間・実力という試験を通じての生徒の無関心への転化という行動をみるにつけ広い意味における新聞というものに

く発行を廃止しました。

その後、新聞局では原稿を待つていてもこないのであれば、取りに行こうという事になり（この頃はまだ新聞は生徒の意見の反映の場という甘い幻想を持っていた。今でも少しは持っているが）アンケートという非個性的な方法を12月に高1・高2のあるクラスで行ないましたが、内容が「70年の為のアンケート」ということだけで、テーマ別ではあったのですが目的が不明瞭になって種々の批判がありました。そして、アンケートの

「それは生徒（局員も含めて）の主体性の欠如であらうと思えます。しかし、温室育ちの過保護の中に受動的に育っている生徒に、主体性というものが必要なのでしょうか。」

「であると思われます。そして、そこに新聞の存在が必要であると思われます。つまり、はっきり言えば、昨年四月以来、訴え続けてきた新聞をあらゆる面の主体的な意見によるパイプ、もしくはお互い

主体性を失う時、すべてのものに受身的に過す時、無気力・無関心・無感動を得るのは当然ではないでしょうか。

今後の展望

我々新聞局が今後すべきことは何でしょうか。もちろん新聞を発刊することですが、その新聞をいかに有意義なものにするかということです。何度も言うようですが、我々が新聞局の活動を通じて強く感じたいのは「生徒の主体性の欠如」であります。しかし、現在の新聞局だけでこの問題を解決

を、お互いが聲援ある場にするということでもあります。そして、そのためにはやはり生徒（局員も含めて）の主体的な意見を待つということによる外ないのであります。

もし、それが行なわれない限り、洛星新聞は学校行事等の取材だけの新聞や局員だけにによる機微誌的な浮び上がった新聞になるか、それとも消滅してしまふしかないと思えます。

今や、洛星新聞の将来はこれを読む（読まない）洛星に学すべき

発行に當つて  
一局員

されてから、アール校長の帰国、文化祭の中止、寮問題等さまざまな出来事があったにもかかわらず、もう一つ出せなかったのは、原稿の不足、技術員の不足等である。長い間の沈滞ムードをつき破るべく起った、文化祭中止問題、寮問題。しかし新聞局はそのだいたいな時と問題解決への役割を果たすことなく、また高層自身も責任を感じながらも無力感に破れ、何ら具体的な行動が出来なかった。その後高一の局員を中心として企画された『週刊群星』も途中

新聞における  
中立とは

局解

人間は絶対者ではない。それゆゑ、新聞局長が「洛星新聞は常に中立の立場にある」と言明しても、何をもちて中立なのかと言われれば果して何であつたかと困つてしまふのである。しかし、これは新聞局自体の不安定を意味するのでもなければ、局長の態度の不真面目さを示すものでもない。これは人間としての誰でも持っているある一種の不安の現われとも思えるのである。

そんな不安定な人間である局長が構成していく洛星新聞とは一体どんな風になるのか。

確かに今の新聞局が絶対的に正しい判断をした新聞を出す事は今すぐにはできないかもしれない。しかし、今の局員はそういう新聞をつくるために努力し続けたいということとははっきりしている。どんな努力なりといわれれば、またまた困るのであるが、しかしこれ先程の中立という問題を含めて、それらに対して新聞局の根底的

つまり、議員とは洛星の生徒一人一人なのである。ただ、右のべた主旨にそつて、そのうちの何人かが造字を組んでいるだけである。だからもしもその組み方に誤まりがあるならどんどん批判されるべきであらうし、改善すべきである。そうしてこそ洛星の洛星新聞として成長していくのではなからうか。

り原稿の不足から、充分な選択が出来なかつたこともあり、読者の不満も大きいと思うが、その不満を次の新聞に結集してほしい。洛星新聞はみんなでつくるものである。

ではないのである（だからといって左翼の意見ばかりや右翼の意見ばかりをのせても中立といえない）だいたひ何をもつていゝわゆる右、左を分け、何をもつて善惡を決定するのであろうか。だから、ただ新聞局は常に良心に従ひ、客觀的立場をとつて生徒全体の意見（といつても多くの人が賛成するからといって必ずしも正しいといえない）を反映させてゆきたい。洛陽新聞は決して生徒から離れた存在ではないのである。作つてゐる局員も生徒であるし、読む方も生徒である。

題や、宗教、高校生会の政治活動、10年前の新聞には、安保問題について、賛否両論に分かれて堂々と意見を述べ合っている。そこには決して一方的でなく、意気の隆通があり、主張の場としては紙面が利用されている。そこには学校を、社会を真剣に考えようとする意欲があふれている。

今度の新聞は復刊第一号でもあ

である。そして常に客観的な見方をするということである。もちろん客観的な見方というのは黙って見ているということではなく、感傷的な偏見をもたらないで事にあたり、言うべき時には言うという立場である。

第三には、何度も言うが生徒の主体的意見の場としての洛星新聞である。決して一部局員と一部生徒の機関誌ではないということである。

さて 中立という問題について少し、具体的に書く。中立というのは保守の立場と進歩的立場との意見を均分して載せるといふこと

に長短さまじき原稿をはめてこま  
わねばならず、苦勞の連続である。  
それでも本業式に間に合わせよう  
とみんな必死になつてがんばつて  
新聞局が昔出した新聞を引っぱ  
り出して読んでいると、昔出た新  
聞の方が今のものよりもずっと学  
校新聞としての役割を果たしてい  
るように思える。学内で起つた問

洛陽においては主床性の欠如ゆゑの無関心、無関心ゆゑの個々の交流のなさ、先生と生徒、生徒と生徒の間の意思疎通の不足は顕著な考へ方を示したい。それは第一に良心に従つてつくるといふことと

で仕事をしていてたいへんきや  
かた。新聞局の再建後すぐに編集  
技術を持った、ただ一人の人がや  
めてしまったので、今の局員はほ  
とんど編集の経験のない素人ばか  
りで見出しの取り方などわからぬ

て新聞局の有名人を危うに陥れ  
しかし、確かに我々だけではど  
うにもならないかも知れませ  
んが、個人個人の主体性の回復  
においての支援もしくは有効な  
手段として新聞は存在できる  
と思えます。

最後に  
これを読んでもうかざった皆  
さんがこんな四角定規の新聞  
を読みたい部分だけ残して破  
りすてられるのを望みます。  
そして、これを読んでもう  
かざった皆さんに言葉をおく  
ります。

一月二日発行が決定されたが再び原稿不足等の理由により発行出来ず、ついに復刊第一号はこの卒業記念号となった。

今（僕がこの原稿を書いている頃）新聞局の局室は発行を卒業式の日（間に合わせるために遅くま

が、我々が新聞局の活動を通じて強く感じたのは「生徒の主体性の欠如」であります。しかし、現在の新聞局だけでこの問題を解決できるでしょうか、ましてや、その主体性の欠如ゆえの無関心によって新聞局の存在が危うい、と。

か、それとも消滅してしまつしか  
ないと思えます。

今や、洛星新聞の将来はこれを読む（読まない）洛星に全うすべての者の双肩にかかっているといえるのであります。

任を感じながらも無力感に破れ、何ら具体的な行動が出来なかつた。その後高一の局員を中心として企画された「週刊群衆」も途中にして中止された。そして冬休みの少し前に編集会議で

今後の展望  
我々新聞記者が今後すべきことは何でしょうか。もちろん新聞を発刊することですが、その新聞をいかに有意義なものにするかということです。何度も言うつもりです。誌的な浮び上がった新聞になる

す身外一つ出せなかったのは、原稿の不足、技術員の不足等である。長い間の沈滞ムードをつき破るべく起こった、文化祭中止問題、寮問題。しかし新聞局はそのだいたいの時に問題解決への役割を果たすことなく、また高員自身も責

受動的に言っている生徒に、主体性というものが必要なのでしょうか。

主体性を失う時、すべてのものに受身的に過す時、無気力・無関心・無感動を得るのは当然ではないか。

は、昨年四月以来、訴え続けてきた新聞をあらゆる面の主体的な意見によるパイプ、もとははお互いをお互いが隣接する場にするということがあります。そしてそのためにはやはり生徒（職員も

ついに洛庫新聞復刊第一号が卒業記念号として発行されることになった。今年の春に新聞局が再建されてから、アール校長の帰国、文化祭の中止、質問題等さまざまな出来事があったにもかかわら

三  
えは生徒（層員も含めて）の主体であると思われまゝ。そして、その性の欠如であろうと思えます。ここに新聞の存在が必要であると思われまゝ。つまり、はっきり言へ

発行に當つて  
一局員



生徒会長となって

門  
屋  
倫

のまにあの決断さえすれば充分なのだと思ふ。しかたがない。見張られながらおれたちは生きてゆくのだ。これがおれたちの時代だ。『上の文は大江健三郎の「われらの時代」という小説の最後の所の引用す。少々なり、僕にとつて前述の文はかなり適確にわれらの時代というものを表わしていると思えます。大江健三郎は、「われらの時代」で、見てからもとべない若い世代をあらわしたかかったといっていますが、僕も含めてそのモデルになりそうな人間がかなり落星にいうような気がします。僕がよく使う言葉でいうとすると「中途半端」というような人のことです。例えば、僕は、今、

この原稿を書きながら、われながら、  
「龍三郎をたしてゐるとは、なん  
とカッコいいんだろうなんて考え  
てゐるんですから。まだまだあり  
ます。一つの行動について考えつ  
るとき、必ずその言いわけを考え  
てから行動することなんかが嫌  
ひの行動の殆どを占めてゐるで  
す。中途端々僕がなま、会長に  
立候補したのでしょうか。一つの  
理由は、日陰でいくら学校のやり  
方はおかしいとツツツ念ひの上  
うに喝えてても、現状は変わらな  
いということ、それよりも自分の  
考えをぶつけてみたかったこと。  
二つ目の理由は誠に個人的なこ  
とで恐縮なのですが、酒を飲ま  
ずに無期停学になった男が神聖な  
生徒会長になるのはけしからぬ  
という既成概念に反抗してやりた

[illegible]

今生徒の管理による掲示板で、  
んなの自由な意見の発表が確保  
された、やがてホーム・ルーム  
も別に述べた状態は改善されて  
くと思えます。そしてそこで初  
め落星について先生方、また  
ラスで本音に話しかけると思  
います。僕個人としては生徒の  
意による掲示板の要求を総会で決  
して正式に学校に要求したいと  
つています。この時、僕達が考  
えなければならぬのは生徒の管  
理のどのような方法で行なうか  
とことです。僕も二三の方法  
を考えますが、みんなも考え  
あはれいと思えます。生徒の管理  
による掲示板を獲得したとき、始  
めて僕は落星のかかっている諸問  
の解決への第一歩をふみだすの  
に思っています。その意味におい

星が、かかえている諸問題は、大なり、予備校なものが、かかえてゐる問題と共通なものが少なくないからです。もっと大きくいへば、今の社会がもっている問題がそのまま星の問題になつてゐるののです。そう考へていくと、たつた歩でも前進するといふことが、たゞなにも重要なことがわかつてゐないと思ひます。くり返していい理と、検閲制の廃止による生徒が、理する掲示板の獲得こそが問題を決への第一歩目なのです。

生きてゆくのに、きつちよいな遠は、今「生きる」といふこととを、を扶輪を表わす語としてでなす動作を表わす語としていく時だと思ひます。

**結果集計報告**

**星新聞局**

総員	96人
回収者数	62人

8、あなたは高校時代に先生に人間的な信頼をもちことが必要だと思いますか  
 A 思う  
 B 思わない  
 9、あなたは現在、先生（教師）に何を感じますか  
 A 勉強の為の手だて（ティーチングマシン）  
 B 人間的な教育者  
 C その他  
 10、あなたは何でも話せる親友がいますか  
 A いる  
 B いない  
 11、あなたは友人に不信感や断絶感を持った事がありますか

60	21 38 59	13 11 38	62	12 50 62	35 23
22、あなたは現在未来を問わずに社会をやめるために	C わからない B いやちがう A そのとおり	21、あなたははっきりして政治的無関心ですか	C 絶対に高校生はいかなる活動であつたとしてもいけな	B ない 20、あなたは高校生在政治活動でよいのかと思いませんか法律で保証された非暴力的な手や集会ならよい B どんな（肩材・火炎ビン使用）活動をしてもよい	な集会やデモに参加した事がありますか A ある

9 29 17 55 7 7 46 60 56 6 62

# 大 募

4 階 局 室 ま で

我々が洛星はいったのは、カトリックを肯定する爲ではなくて、カトリックを理解する爲である。学校の教育理念に対して常に「Yes」を以て答える人間になる爲ではなくて、批判的な思考（それは学校に対して常に反抗するという意味では議論ない）を身につける爲である。この当たり前ともいえる点について教師も生徒も自分なりに考え、そしてそれを自己の次元にとめておくのではなくて洛星という次元にまで持つてこなくてはならない。以下僕なりにこの問題及びそれを通じて出てくるであろうの問題について考えてみようと思ふ。

倫理学の命題ないしは道徳的判断というものには現にある状態については語らずにあるべき状態について語る。即ち「盗みをしてはいけない」と言うとき、それは現実の世界に盗みがないということではなくて、現実がなという状態かに関係なく盗みをすべきでないという事を言っているのである。つきつめていけば、それは「盗み多きとするな」という命令形をとっている」と考えることが出来る。したがってそれは科学と数学におけるよ

うな事が偽か、明確な基準をもたえない。それはライヘンバッハの次の言葉、明確に表現されていいてゐる。「すべての人は、自分自身の道徳的命令を打ち立て、万人がその命令に従うように要求する権利がある」以上の考察で明らかになうに教育においてカトリックなカトリックのみを教え、他の思想

**主張**

洛星に  
教育

から何らかの意味で生徒を隔離するというのは妥当でない。教育の真実を居すことをその理想とすべし、又、そうでなければならぬ。とすれば教育が生徒の思想育においてとるべき態度は、バートランド・ラッセルが言っているように「我々の意見を証拠にもとめて形成し、証拠が保証してゐない確信の度合に応じ、この意見

懐くという習慣」をつくりあげ、  
爲に生徒の自由（意見の）を保障し、  
し尊重した上で助力するといふのが、  
が最も望ましい。しかるにカトリックはドクマである。それは昔  
Yes or No の形で解答要求  
確からしきといふ概念の欠餘が、  
する。したがっていきなりカトリック  
を半強制する（例えば、サマ  
育理念の再  
西村  
おける  
（こと）はある生徒に対しては  
トリックを肯定するといふ形で  
グマにおしこまれるし、又逆な  
味において即ちカトリックに反  
数するといふ形でドクマを他の  
徒にはもたらす。  
それは最近の集会におけるある  
種の生徒の言動（例えば、校長  
独裁」といふ言葉やあるいは論  
を無視した意見や反論）に明確

泰 一

な意味で生徒に対して学校が力をつくすことを理解させることは實績をあげるに値する。しかしそれが理解から理解を前提としなげ強迫へ移行しようとする時我々は黙然することば許されぬ。

しかもその移行は神父がカトリックと生徒を愛するということゆえにかえつて起こりやすくなるのである。即ち神父の目はカトリックは永遠の真理と見えてゐるであつた。少なくとも自己の信じている宗教を積極的にドグマであるとは思はないものである。そして神父はこれが永遠の真理と思つてゐるこのカトリックを生徒に教へようである。ここに神父が愛するがゆゑに生徒の言論の自由をうという矛盾が存在する。その力的な表われは政治活動の禁止でつり檢閲制度である。これらの制は教師（一部の）の目から見れば生徒が悪い思想や行ないから防衛するに非ず大切なものであつた。

しかしそれは我々の目から見れば生徒の自由を束縛するものでないのだ。この点お教師は気付いていない。あるいは付いても認めようとしない。

リならカトリックこそ唯一の正統な信仰であり、したがって教師がカトリック教徒でない限りは解任されるべきである。一方通行が必然的に正当化されたのである。我々はこうした矛盾に對し向かわなければならぬ。論そのやり方としては生徒会を「用するものいい」、他のグループを「結成するという方法もある」として、しかし何よりも大切なことは僕達の一致協力した組織的な運動であらう。そしてまず第一として検閲制度廃止及び集会自由を第一目標に掲げるべきであらう。

なぜなら教師と生徒・洛星と部といったコミュニケーション段階以前に生徒と生徒のコミュニケーションは必要とされるのであり、それによって初めて洛星という業は集団を表現する名称となるのである。今のようになたけつて個々にはばばに契約関係結んだ原子的な人間の単なる集合以上のものでは決しない。

以上のこと各人心に留めておくものである。

1、あなたは現在留星をよく  
 思っていますか  
 A 満足  
 B 不満  
 2、あなたは今以上に留星を  
 よくしようと思っていますか  
 A 思う  
 B 思わない  
 3、あなたは過去に留星をよく  
 しようと考え、行動した  
 事がありますか  
 A ある  
 B ない  
 4、あなたは現在留星をよく  
 しようとして行動しているか  
 A 思っています  
 B 思わない  
 5、あなたにとって留星とは  
 何ですか(率直に)

[illegible]

9	34	16	59	14	3	25	19	61	6	47	9	62	3	59	62	7	53	60	14	6
<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p>25、あなたは万国博を見学したいと思えますか A 思う B 思わない C どちらでもよい</p> </div> <div style="width: 45%;"> <p>24、あなたは日本で万国博が開かれる必要があると思いますか A 思う B 思わない C わからない</p> </div> </div>																				

4 4 12 20 3 7 9 19 3 51 8 62 5 6 50 6

---

# 投稿

## 投稿は中学

# 主張

洛星における

# 教育理念の再検討

西村泰一

## アンケート結果集計報告

主 催 洛 星 新 聞 局

総員 96人

回收者数 62人

[illegible]

# 集 募 大 稿 投

投稿は中学4階局室まで



「今回の会長選挙をめぐる紛糾によって得られた最大の収穫は、結局、生徒の生徒会に対する意識が向上した点であろう。事件の経過は決して喜ぶべき内容ではないが、その結果は一つのキッカケとして重要であるといえよう。まず、私達は將卒に事の判断を急ぐことを何よりも戒めなければならぬ。第二に、私達の生徒会が無視された、或は弾圧した、反動たときまく前に今回の事件がはたして避け難いものであったかどうかを考慮すべきである。無論、輔導部の責任は重である。しかしながら輔導部の生徒会に対する姿勢をこのように規定したのは、私達の生徒会の歴史ではなかつたか。

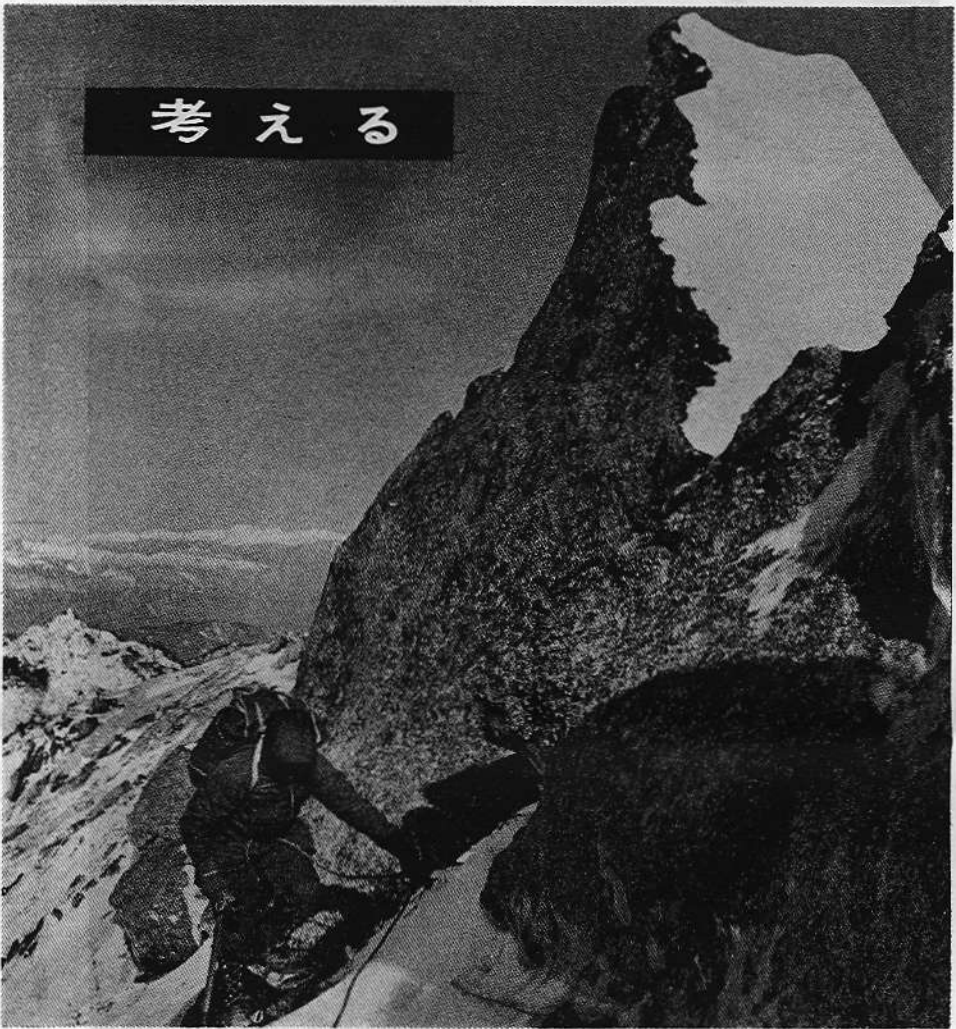
# 自治

## 生徒会の 根本問題とは

ず「幹部」と「會員」は離反する一途である。しかもその傾向は幹部の活動が総花的になければならぬだけ一層助長される様に見える。補導部が、そのように背後の団結を欠く幹部の意見に對して、常に抑制的、消極的態度をとってきたのはむしろ当然であるといふべきである。だからこそ、今、私達自身が深く反省すべきなのである。第一に、歴代幹部の「なれあい」をなみなすく看過したことを、そして、誰も「生徒会の根本問題」に眼を向けなかったことを。

次に私達に「生徒と幹部の意思の疎通」を生徒会の根本問題と錯覚しやすいことを注意すべきである。「意思疎通」は確かに重要な事柄ではあるが、それは、政策上の問題に過ぎない。歴代幹部の大きな誤ちは、ここにもあるのだ。会員と幹部の離反は、意志の不通というような簡単な問題ではない。会員も幹部も共に、根本問題を見失って、生徒会が真になしうること、なすべきことを忘れ、その結果、生徒会の価値をどこに求めるべきかを知らないことが現在の不振を招いているのである。では「生徒会の根本問題」を何に求めるべきであろうか。その為には、まず、現在の生徒会について、もう一段考えを進める必要があると思う。

考 え る



の生徒会は「発案」とか論ずる。それでは執行委員会が、一クラブ活動の様に許されているのと何ら変わりがないではないか。そのような生徒の姿勢が執行委員会に、表面的、総花的活動を強いることになってしまふのだ。

生徒会とは本来、学校の中にあつて、生徒の総意を代表し、利益を守り、学校生活を向上させる為の協力機関に外ならない。文化祭を活発にやる事が、勿論生徒の総意に基つてゐる訳ではないが、私達には高校生として、或は、洛星の生徒として、社会に對して、或は、学園の未来に對して、真剣に考え、行動せねばならないことが山積されてゐるのではないか。前会期には「高校生と政治」の問題が湧きおこつた。しかるにこの問題を、表面的活動を本位とするような生徒会では、どうしようもなかつたではないか。執行委員会と輔導部の「かけひき」によつて生徒会が運営される限り私達の求めるものの核心に達することはできないのだ。いくら執行委員会が活発に立ち回つても、一般會員は生徒会そのものに疑義を感じ、これに絶望して生徒会を見捨てていく。

この生徒会の現状を救うものは「自治」の達成に外ならない。執行委員会と補導部の独断的な「かけひき」を排して、会員の総意に基づく民主的機関、脱皮、生徒会の本来の目的へ進む線路にのせなければならぬ。しかし、私達は「自治」の本質についても、誤まつてはならない。「自治」とは自分自身の問題を、自分自身で解決することであるべきものだ。活動のみを主眼とする執行委員の名實欲実現の場でも、学校が活動の雑用を処理させるものでもないはずだ。しかし「自治」を実現する為には、現状を犠牲的に維持することよりも、はるかに、大きな困難が待っている。だが、私達が真に「目標」に近づく為に必要手段を認識するとき「自治」によつて

「その責任は誰がとるのか」と、それは責任逃避・転化という形で責任という物が、我々が認識するか「……の責任を問う」等、とかあったように思える。つまり、前る前に押しつけられてあるという最近では「責任」という言葉をよく記したが自分以外のものに責任を、そして別のいい方をすれば我々自身に責任を、そして、自分には責任を自覚していないといふとらせる事によつて、自分には責任を自覚していないといふ「自由なき自由」と、我々はよく

物事についての責任の所在を、任がないという事とその物事に対するのであるが、とにかく我々は要求する。しかし、我々は、自らかじめ、規定し、それを遂行して無関係であったことを明確に、自分ではあまり気にかけていない、由に何でもやるという事に伴う際、起こる問題の責任をその責しよとする以外何ものでもない責任というものにわずらわせられ、責任というものを、ないがしろにするのを嫌う傾向にあるといえず、しがちではないだろうか、それゆゑ、

随感

して、後は自分は何の關係もなかつたように振まう事ではないだろうか。つまり何事に対しても自己以外に責任をおく事によつて、常に自分の安定を求めようとする行動。これは我々の日常でもよく見

でるかもしれない。しかし、そ

# 責任

々にも文し。責任がなされたと自分という者に対して責任をとる者ものといへない。決してこれは年代的なものでない。かえつて年をとつた方が処世術という無責任で武装する傾向がある。やうにもある。そして責任というも

# 責任

できるかもしれない。しかし、そ与えられたものだけを行なつては  
 れが決して自分に責任がなかつたいないだろうか。

にもみえる。そして責任というものは年代的というより、個人の自

生徒総会が何回も流合し。そしてということを証明するとは思えなくて、職員会議による中止決定。いい。そのまわがつた相手を温存させて、誰の責任か、執行部の怠慢。せていたという事自体、我々に責の責任でないとと思う事でキリストは規定されたものでなく自ら規定しよう者であれば、会員全体の無任があるのではなかつたかと思へたのである。人間を救うことが自覚といふものもかつているように思える。そして橋岡という間柄もこの辺から解決しつゝな気も

(た)

極的な事勿れ主義の優柔不斷は、学園の発展を妨げるばかりである。ここまで成長した誇り高き学園の今後の発展は、今や「生徒」にかかっているのだ。指導一点張りで、生徒はますます依存的になつてしまふ。今こそ学校は、学園の将来の為に思い切つた処置をすべきである。又、私達は十分な自治意識をもち、真に「学園の将来」を担ふ氣概をもつて、学校の勇断を促進させようではないか。

も必要ではないかと思ふ。そして我々もいつまでも、それこそ消極的な事勿れ主義でいるより「自分自身の問題を、自分自身で解決する」という自治意識をもつて常に向上を求めなければならないのではなからうか。

## 新聞局会計報告

昭和43年度

新聞局會計報告

昭和44年度

いよいよ「洛星新聞」が約三年ぶりに発刊されることになった。この「洛星新聞」を今までより内容の充実した新聞にするためにも新聞局に集まれ、

前期(43年度)	繰越金	四七、一八〇九円
今年度収入	〇円	
支出	四、九七〇円	
支出内容		
更替紙	二、〇二四円	
原紙	一、五二五円	
雑費	一、四三五円	

# 局員大募集

希望者は中学4階局室まで



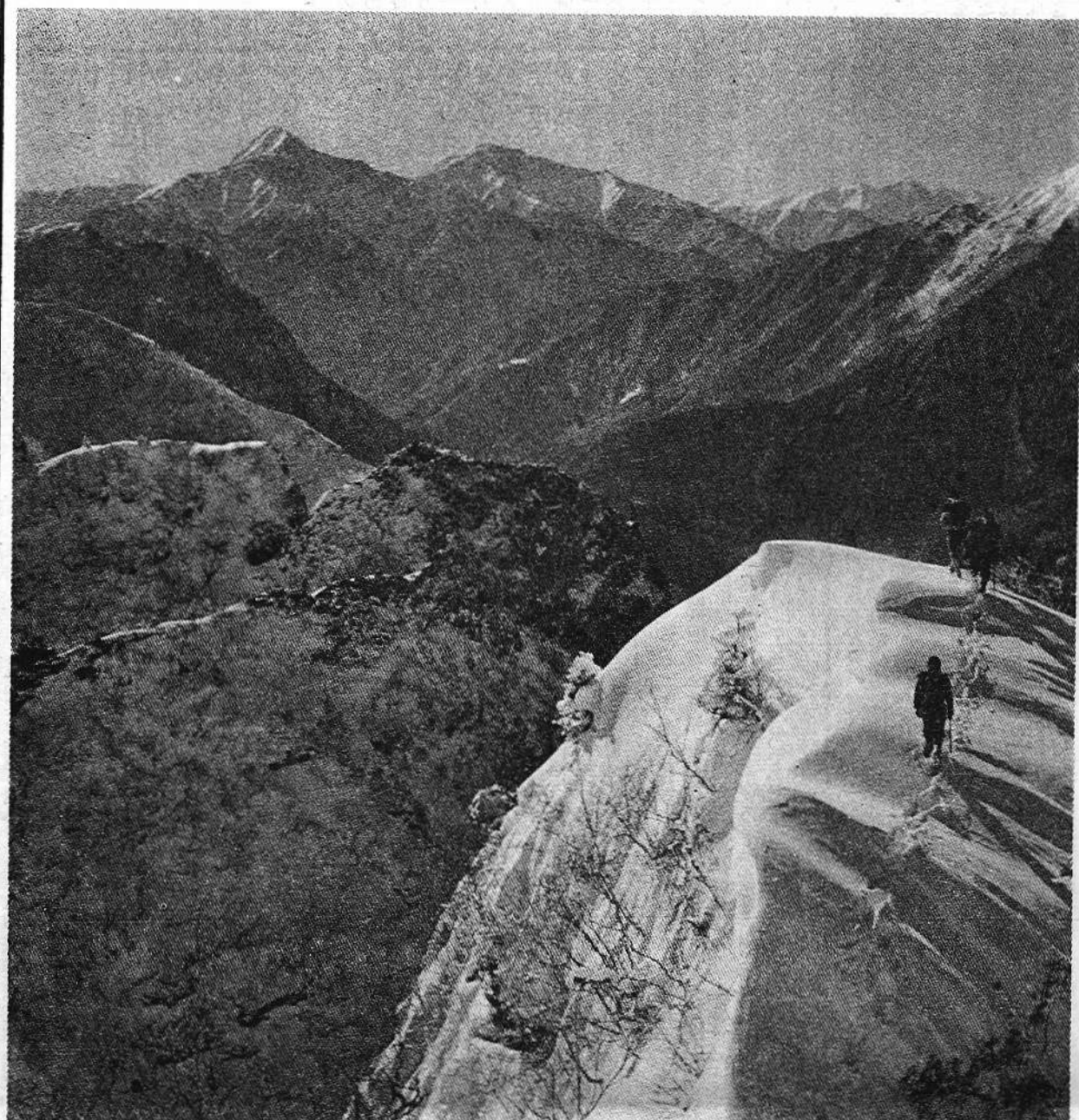


洛星新聞編集局  
京都市北文小松原南町  
TEL (463) 3281 (代)

印刷 吉川印刷工業所

# 新生する新聞局

## 新聞を洛星に学ぶ すべての者の為に



### 局 解

総 括

ここに、長らく休刊となつていた洛星新聞を復刊します。洛星新聞は、昨年4月に新聞局再建委員会を設け、その後、幾多の困難を乗り越えてここに復刊第一号を発刊します。しかし、この復刊第一号においても我々は所々に足りない所や、また、不満な点が多く(いや全部というわけではない)ある種のもの足りなさを感じています。そのうち形となり、数回にわたるという事を感じる事自体、我々の活動の未熟さといえるかも知れません。しかし、我々が新聞を発行するにあたって、我々が活動するにあたって、最も強く感じたいというスローガンをかけたのであ

「新聞局に対する無理難題、また「希望」ということでした。生徒中から学校からも、全然といっていいくらい新聞局の存在を必然と認められていないように感じられました。

そこそこ、洛星新聞局は再建委員会を設け、その後、幾多の困難を乗り越えてここに復刊第一号を発刊します。しかし、この復刊第一号においても我々は所々に足りない所や、また、不満な点が多く(いや全部というわけではない)ある種のもの足りなさを感じています。そのうち形となり、数回にわたるという事を感じる事自体、我々の活動の未熟さといえるかも知れません。しかし、我々が新聞を発行するにあたって、我々が活動するにあたって、最も強く感じたいというスローガンをかけたのであ

## 新聞における 中立とは

局 解

人間は絶対者ではない。それゆえ、新聞局員が「洛星新聞は常に中立の立場にある」と言明しても、何をもちて中立なのかと言われれば果して何であらうかと困ってしまうのである。しかし、これは新聞局自体の不安定を意味するものではない。局員の態度の不真面目さを示すものでもない。これは人間としての誰れも持っている一種の不安の現われとも思えるのである。

そんな不安定な人間である局員が構成していく洛星新聞とは一体どんな風になるのか。

確かに今の新聞局が絶対的に正しい判断をした新聞を出す事は今すぐにはできないかもしれない。しかし、今の局員はそういう新聞をつくるために努力し続けたいという心は、きりきりしている。どんな努力だといわれれば、またまた困るのであるが、しかしここ先程で中立という問題を含めて、それらに対して新聞局の根底的

### 発行に当って

一局員

ついに洛星新聞復刊第一号が卒業記念号として発行されることになった。今年の春に新聞局が再建されてから、アール校長の帰国、文化祭の中止、寮問題等さまざまな出来事があったにもかかわらず、外へ一歩出たことがなかった。原稿の不足、技術上の不足等である。長い間の沈滞・アードをつき破るべく起った。文化祭中止問題、寮問題。しかし新聞局はそのたじろぎなく、また局員自身も責任を感じながらも無力感に破れ、何ら具体的な行動が出来なかった。その後、局員を中心に、企業とされた週刊雑誌も途中にして中止された。そして冬休み、冬休みの少し前に編集会議で一月二日発行が決定されたが再び原稿不足等の理由により発行出来ず、ついに復刊第一号はこの卒業記念号となった。

今(僕がこの原稿を書いている頃)新聞局の局舎は発行を卒業式の日間に合わせるために遅くまで仕事をしていたいへんじやなか。新聞局の再建後、局員は技術を持った、ただ一人の人がやめてしまったので、今の局員はほとんど編集経験のない素人ばかりで見出しの取り方などからぬことが多く、定められた範囲の中に長短さまざまな原稿を詰めこむには、苦勞の連続である。それでも卒業式に間に合わせようとする必死心でがんばっている。

新聞局が昔出した新聞を引っぱり出して読んでみると、昔出た新聞の方が今のものよりもずっと学校新聞としての役割を果たしているように思える。学内で起った問題や、宗教、高校生の政治活動、10年前の新聞には全然問題について、賛否両論に分かれて書かれて意見が述べ合っている。そこには決して一方の意見のみの押し付けがあり、主張の場として紙面が利用されている。そこには学校を、社会を真剣に考えて行こうとする意欲があふれている。

今度の新聞は復刊第一号でもあり原稿の不足から、充分な選択が出来なかったこともあり、読者の不満も大きいと思うが、その不満を次の新聞に結果してほしい。洛星新聞はみんなで作るものである。

さて、中立という問題について少し、具体的に書こう。中立というのは保守的立場と進歩的立場との意見を均分して載せるということではないのである(だからといって左翼の意見ばかりや右翼の意見ばかりをのせても中立といえない)。だいたい何をもちていわれる右、左を分け、何をもちて意見を決定するのであろうか。だから、たまたま新聞局は常に良心に従い、客観的立場をとって生徒全体の意見(といっても多くの人が賛成するからといって必ずしも正しいとはいえない)を反映させてゆきたい。洛星新聞は決して生徒から離れて存在ではないのである。作っている局員も生徒であるし、読む方も生徒である。

つまり、局員とは洛星の生徒一人一人なのである。ただ、右に述べた主旨をもちて、そのうちの何人かが活字を組んでいるだけである。だからもしもその組む方に誤りがあるなら、どんな批判されるべきであらうし、改善すべきである。そうしてこそ洛星の洛星新聞として成長していくのではないだろうか。

えは生徒(局員も含めて)の主体性の欠如であらうと思えます。しかし、温言も過保護の中に受動的に育っている生徒に、主体性というものが必要なのではないでしょうか。

主体性を生ずる時、すべてのものに受身的に過す時、無気力・無関心・無感動を得るのは当然ではないでしょうか。

今後、洛星新聞が今後すべきことは何でしょうか。もちろん新聞を発行することですが、その新聞をいかに有意義なものにするかということ。何度か言うようですが、我々が新聞局の活動を通じて強く感じたのは「生徒の主体性の欠如」であります。しかし、現在の新聞局だけでこの問題を解決できるでしょうか。ましてや、その主体性の欠如への無関心によって新聞局の存在さえ危い時に。

しかし、確かに我々だけではどうにもならないかも知れませんが、個人個人の主体性の回復においての支援もしくは有効な手段として新聞は存在できると思えます。

洛星においては主体性の欠如への無関心、無関心ゆえの個々の交流のなさ、先生と生徒、生徒と生徒の間の意識疎通の不足は顕著な考え方です。それは第一に良心に従ってつづけるということである。そして常に客観的な見方をすることである。もちろん客観的な見方というのは照って見ているというのではなく、感情的な偏見をもたないで事実にあたり、言うべき時は言うという立場である。

第二には、何度か言うが生徒の主体的意見の場としての洛星新聞である。決して一部局員と一部生徒の機関誌ではないということである。

さて、中立という問題について少し、具体的に書こう。中立というのは保守的立場と進歩的立場との意見を均分して載せるということではないのである(だからといって左翼の意見ばかりや右翼の意見ばかりをのせても中立といえない)。だいたい何をもちていわれる右、左を分け、何をもちて意見を決定するのであろうか。だから、たまたま新聞局は常に良心に従い、客観的立場をとって生徒全体の意見(といっても多くの人が賛成するからといって必ずしも正しいとはいえない)を反映させてゆきたい。洛星新聞は決して生徒から離れて存在ではないのである。作っている局員も生徒であるし、読む方も生徒である。

つまり、局員とは洛星の生徒一人一人なのである。ただ、右に述べた主旨をもちて、そのうちの何人かが活字を組んでいるだけである。だからもしもその組む方に誤りがあるなら、どんな批判されるべきであらうし、改善すべきである。そうしてこそ洛星の洛星新聞として成長していくのではないだろうか。

最後に、これを読んでくださった皆さんがこんな西角定規の新聞を讀みたい部分だけ残して破りてくれるのを望みます。そして、これを読んでくださった皆さんに言葉をかけます。弱者は与論におおひ、弱者は拒否し、弱者は判断し、進人はこれを左行する(ローラン夫人)

な考え方です。それは第一に良心に従ってつづけるということである。そして常に客観的な見方をすることである。もちろん客観的な見方というのは照って見ているというのではなく、感情的な偏見をもたないで事実にあたり、言うべき時は言うという立場である。

第二には、何度か言うが生徒の主体的意見の場としての洛星新聞である。決して一部局員と一部生徒の機関誌ではないということである。

さて、中立という問題について少し、具体的に書こう。中立というのは保守的立場と進歩的立場との意見を均分して載せるということではないのである(だからといって左翼の意見ばかりや右翼の意見ばかりをのせても中立といえない)。だいたい何をもちていわれる右、左を分け、何をもちて意見を決定するのであろうか。だから、たまたま新聞局は常に良心に従い、客観的立場をとって生徒全体の意見(といっても多くの人が賛成するからといって必ずしも正しいとはいえない)を反映させてゆきたい。洛星新聞は決して生徒から離れて存在ではないのである。作っている局員も生徒であるし、読む方も生徒である。

つまり、局員とは洛星の生徒一人一人なのである。ただ、右に述べた主旨をもちて、そのうちの何人かが活字を組んでいるだけである。だからもしもその組む方に誤りがあるなら、どんな批判されるべきであらうし、改善すべきである。そうしてこそ洛星の洛星新聞として成長していくのではないだろうか。

最後に、これを読んでくださった皆さんがこんな西角定規の新聞を讀みたい部分だけ残して破りてくれるのを望みます。そして、これを読んでくださった皆さんに言葉をかけます。弱者は与論におおひ、弱者は拒否し、弱者は判断し、進人はこれを左行する(ローラン夫人)

な考え方です。それは第一に良心に従ってつづけるということである。そして常に客観的な見方をすることである。もちろん客観的な見方というのは照って見ているというのではなく、感情的な偏見をもたないで事実にあたり、言うべき時は言うという立場である。